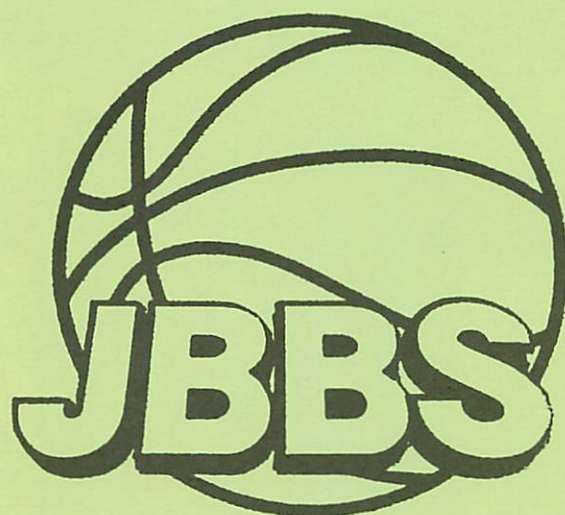


バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:26



2005年4月

日本バスケットボール振興会

KIRIN 激流

激
的
水
分
補
給
ス
ポ
ド
リ



目 次

○ 特集	
全日本総合4連覇	広報部会 3
“チームプレイに徹しバスケットを楽しく”	
アイシン 鈴木貴美一 ヘッドコーチ	
○ 特別寄稿	
記者の目から見た日本のバスケット	由利 英明 9
○ 日立甲府の創部から甲府クィーンビーズへの変遷 . .	島立 登志和 11
○ わが軌跡	
私のバスケット人生	川本 禮治郎 13
○ 会員だより	
回想60年 第4クォーターを頑張る	和賀 健二 16
○ 平成16年度春季理事会報告	18
○ 計報	
鈴木正三先生を偲ぶ	関口 莊次 28
鈴木正三先生を偲んで	野口 昌三 29
実行の人 鈴木先生	従野 明宏 30
武山栄雄先輩を偲ぶ	上谷 富彦 32
スポーツイベント社相談役 奥山清二氏逝去	南木 貞夫 34
○ 日本協会 「プロ化実行検討委員会」の答申内容	35
○ 日本実業団連盟新役員体制	38
○ 関東大学バスケットボール連盟80周年記念式典	39
○ プラザ こぼればなし	39
○ 事務局だより	40

特集

—— 全日本総合4連覇 ——

“チームプレイに徹しバスケットを楽しむ”

アイシン、鈴木ヘッドコーチ

担当：広報部会



鈴木貴美一氏

昭和34年東京都出身、能代工業高校から法政大学を卒業後、日本鉱業へ。フォワードとして活躍、どのポジションでもこなせる器用な選手として日本代表選手にも。故障のため若くして引退後、7年間の秋田経法大学コーチを経てアイシン・ヘッドコーチに就任して10年。

—— オールジャパン優勝おめでとうございます。これで4連覇という記録を作りましたね。

有難うございます。4連覇というのは数十年前日本鉱業が達成してから久しぶりの記録だそうで、大変名誉なことです。

—— 今回のオールジャパン制覇の要因はどのあたりでしょうか？

すべての試合を通してディフェンスが良かったと思います。うちはシュートがあまり入りませんでしたが、それ以上にディフェンスを頑張ったことで相手チームのシュートが外れ、マッカーサー選手のリバウンド数も多くなり、勝利につながったと思います。

バスケットボールでは相手をゼロ点に抑えるなどということはあり得ませんので、いかにして相手に苦しいシュートを打たせて失点を少なくするかがポイントになります。試合の流れとしてある約束事を組み立てて、相手をその許容限度内に押さえ込むことがうちのやりかたです。

—— 30代の選手が大活躍していますが、ベテラン選手を多く使うきっかけは何だったのでしょうか？

私が10年前にアイシンへ入ったとき、将来日本代表選手になるような大学生の大物を採用しようとして声をかけたのですが、会社が愛知県の刈谷という田舎町にあったせいでしょうか、なかなか来てもらえませんでした。当時の学生はみんな都会に会社があるチームに目が向いていたようです。

ちょうどその頃、日本リーグチームの休部や廃部が相次ぎ、移籍可能な一線級の選手が出てきましたので、それらの選手に目をつけました。第一線で通用するこれらの選手は、一歩間違えると悪い方向へ走ってしまうこともあります。逆にうまく機能すればいい方向へまとまると判断して、ベテランの移籍選手を集める努力を始めました。このような移籍選手を多く集めるためにはそれなりの条件と工夫が必要ですし、もちろん会社にも目的などを良く理解していただく必要がありました。

—— 結果的に鈴木さんの目の付け所は良かったわけですね。

彼らは契約選手というプロ待遇ですから、勝たなければ報われないわけです。年齢的には上でも勝てるチームを作れば彼らも目立つようになるし、待遇的にも改善されるわけですから、如何にして勝てるチームを作るかでした。経験豊富で失敗もさんざん舐めてきた選手たちは、勝ち方を知っています。体力的には若干劣るかもしれませんが、バスケットボールというスポーツは体力だけがものを言うスポーツではありません。オンザコートで5人が如何に協力して得点をするのか、どうやって相手の得点を自チームの得点以下に押さえ込むか、というようなことを考えることも必要なのです。

—— 試合で見る限り彼らは本当に一生懸命プレイしているようですが？

元いすゞから来た佐古選手や、NKKを辞めた後藤選手など個性の強い選手が、一生懸命にやってくれています。各選手とも特徴がありますので、それをいい方向へまとめていくようにやっています。それぞれの選手がかなりの技術や豊富な経験を持っていますが、自分勝手にプレイをしてしまうとチームバスケットが壊れてしまいます。コートにいる5人の選手が一致協力することが重要なのです。

彼らはアイシンに来てから更にチームプレイを重視するようになりました。年齢とともに身体能力は多少落ちますが、技術力や状況判断能力はまだまだ上昇しています。

私はバスケットボールをイメージ的に言うと、大体26歳くらいまでは身体でバスケットを覚えて伸びる段階、それからは頭脳的にバスケットを覚える時期と見ています。昔と違って最近では健康管理も充実しており、単に年齢が上がったからといってプレイが悪くなるわけではありません。例えば外山選手などは技術的にもまだ伸びており、常に考えながらプレイできる選手のひとりだと思います、長い間プレイを続けたいという人のお手本のような存在で40歳くらいまでプレイできるのでないですか。

—— ベテラン選手の味をうまく引き出しているということですね。

外山選手や佐古選手はアイシンに来たばかりの時は、あまりチームにかみ合いませんでした。当然、試合への出場時間も多くありませんでした。それが少しずつ良くなって一人一人がチームに馴染もうと努力し、自分自身がチームプレイに徹することの重要性に気がついたのだと思います。個人プレイはやればいくらでも可能ですが、それは個人選手が目立つだけでチームの勝利には結びつきません。ベテラン選手のフルタイム出場は当然無理ですので、ピリオド間のタイムアウトの時間もフルに活用して選手を有効にアジャストしています。あの2分間はチームの建て直しやメンバーアジャストに絶好の時間ですね。

JBLの場合、現在ずば抜けているチームはありませんので、どこが勝ってもおかしくないのが現状です。アイシンの場合でも個人プレイが目立った試合は負けていますし、個々の選手が感情的になったり、勝手なプレイをしたりすると結果は必ず悪くなっています。チームプレイに徹していることが勝ち星につながっていると思います。

—— ラグビーなどでもフォアザチームというスタイルがでてきているようですが、選手たちをまとめるコツはなんでしょう？

人は誰でも短所と長所を併せ持っていますが、短所を指摘するとその人の長所にまでブレーキをかけてしまいます。いいところを認めて伸ばすように仕向けたり、いいところを発揮できるような環境を整えてあげるのがコーチの役目だと思います。

例えばフォーメーションひとつとってみても、選手の良いところを引き出すようなことを考えればいいのではないのでしょうか。最近のバスケットは、一人の選手が40分間フル出場するなどということは考えられないほどスピード化されていますし、分担化されていますから、出場する選手が与えられた時間にどうやって自分のいいところを発揮できるかにかかっています。

—— コーチの指導に対して選手たちの反応は如何ですか？

コーチの言うことをただ「はいはい」と聞いている選手はだめですね。そのときに返事をしていても自分の身についていないから、コートへ出ると云われたことを忘れてしまう。

大体試合中多くのことを言われても、そんなに覚えられるものではありませんので、私は試合中に多くのことは言わないようにしています。

アイシンでは、練習のときなど自分の意見を自由に言ったりしてお互いにぶつけ合っていますが、そのこともチームプレイの向上に役立っています。私たちが育ったころは優等生が好まれる時代でしたが、最近は変わっていると思います。指導が押し付けになると人の個性が発揮できなくなり、ひいてはいいところをつぶしてしまうこともあります。個々の選手が間違った方向へ行きそうなどきだけは注意しますが、それ以外は経験や失敗によってその選手の切り替えを図っています。ただし失敗したときコーチに原因の質問があったときは、きちんと答えるようにしています。

—— アイシンのコーチを引き受けるきっかけは？

丁度10年前、当時監督をされていた、杉浦良昭さんという方から懇請されてアイシンに入りました。杉浦さんはアイシンをバスケットで日本一にしたいという情熱を持っておられ、その熱意をすごく感じましたので、日本一を目指して一緒に努力しようと思いました。

私が入った頃は弱小チームで日本一などということは夢のような世界でした。それがいつしか夢から目標になり、やがて手が届くようになりました。

どんなことでも適当にやっていて一番になるなんてことはあり得ませんし、努力を積み重ねることによって、やがてトップが見えてくるのではないのでしょうか。いすゞが休部になる2～3年前のリーグで初めて3位になりましたが、そのころ「頑張れば何とか手が届きそうだな」と感じました。

—— 鈴木さんご自身は比較的早く選手を引退されて、指導者の道へ進まれましたが現在はどう思っておられますか？

たまたま膝を悪くして28歳で現役を引退しました。若いうちに選手を辞めたことによって、指導者としての勉強に打ち込めましたし、前向きになる意欲が出ました。コーチは選手と比べれば地味な立場であり目立ちませんが、現在は燃焼の真っ最中です。

指導者の方も多くおられますが、選手の頃燃えきってしまうと、なかなか指導者としての勉強は大変なのではないかと思っています。

日本鉱業を辞めてから秋田経法大で7年間指導者としてお世話になりましたが、今から考えますと秋田という立地条件や、若いうちから指導者の勉強をしたことが自分にとっては良かったのではないかと思います。

—— 会社の体育館など環境面は如何ですか？

やはり強くなるにつれて会社からも認めていただけるようになり、最初なかった体育館の暖房設備なども今では整っています。私が入った頃は残業などで練習もままならない状況で、バスケットボールを楽しく前向きに取り組ませるのに苦労しました。また、いくら環境が整っても、勝ち続けるということにはあらゆる面での持続性が必要で、結構大変ですね。それにオールジャパンが外国人選手抜きになったことや、競技時間がハーフタイム制からクォーター制になって、ピリオド間のタイムアウトが有効に活用できるなど運がよかったのかも知れません。

—— 外国人選手問題についてどう思われますか？

オールジャパンは外国人選手抜きですがトーナメントの一発勝負なので気が抜けません。外国人選手がいると学生チームが対抗できないという意見もあったようですが、外国人抜きになってから学生との差がさらに開いたように感じています。

よく外国人選手がいるから大きい日本人選手がゲームに出られず、育たないのではないかという意見を耳にしますが私は違うと思っています。要は外国人選手に対抗できるような日本人選手を育てればよいことで、プレッシャーをはねのけて外国人選手に追いつくようにすれば日本のレベルアップになると思います。アジアを見ても中国、韓国、台湾などの強い国はみな外国人選手が二人入ってやっていますし、他のスポーツをみても、外国人選手が入っている種目の方が国際的に強くなっています。

—— 外国人選手がいるリーグ戦としないオールジャパンとではどちらがやり易いですか？

リーグ戦の方が難しいですね。外国人選手は自分が覚えたディフェンスが身体に染み付いているので、どうしてもファウルトラブルが多くなります。日本でプレイする以上日本の審判の判定にあわせたプレイをするよう言うのですが、ときどき切れてしまいます。

結果的にそういうゲームは負けていますので、ゲームのあと良く反省させています。審判も人間なのでから完全に見極めることは不可能であり、プレイヤーに対しては判定にあわせたプレイをするよう要求しています。審判も同じバスケットが好きでやっている仲間ですし、コミュニケーションを良くして信頼関係を築いていけば済むことで、審判に対して悪い印象を持っている人はいないと思います。

オフェンス面から言うと外国人選手がいた方がいいですが、ディフェンス面からみると日本人選手だけの方がいいですね。

—— 将来の展望についてはどのように考えておられますか？

先行きのことを考えますと全日本代表選手になれるような人材を採用する必要がありますが、今、若い選手で一生懸命努力している人もいますので、すぐに新人選手をとということではありません。しかしながら、いずれは世代交代という時期が来ると思います。昔はチームの所在地が刈谷だというだけで敬遠されていましたが、強くなったお陰でそれも解消して良い選手がアイシンというチームを注目してくれるようになりました。最近ではアイシンへ入りたいという希望者が多く嬉しい悲鳴です。だからといって誰でも良いということではありませんし、アイシンに入ることによって結果的にその選手をつぶすことがあってはなりませんので、その辺はシビアにみています。

—— 会社のバスケットボールへの理解度は如何ですか？

杉浦部長が凄いバスケット情熱家で、会社の信頼度も厚くいろいろと面倒を見てくれます。会社との交渉などにご一緒することはありますが、そちら方面はすべてお任せして私は現場の方をきちんと見る形です。役割分担も明確でそういう点では非常にやり易いですね。組織的にいえば内部からもめて崩壊していく形が一番怖いですし、勝ち続けるためにも組織はしっかりしている必要があります。

アイシンという会社は厳しさもありますが、一生懸命頑張った人に対しては大変面倒見のいい会社で温かみもあります。バスケットボールについても良く理解して面倒を見ていますが、そのことも勝ち続けられる要因になっており、大変感謝しています。

—— 工場が大きな火災に合ったことがありましたが、体育館などへの影響はありませんでしたか？

体育館とは別の場所だったので影響はありませんでしたが、自動車部品を製造している工場だったので製品の供給に問題が起きました。アイシンは世界各国の自動車会社に製品を納入していますが、工場が焼けたために納品できなくなり、自動車会社の製造ラインがストップするというアクシデントに見舞われました。設計図などの資料も開示したのですが、高品質の部品を低価格で供給できる部品メーカーが他になかったらしいです。

—— 日本の男子バスケットについてどう感じていますか？

何と言っても国際的に強くならないといけません。現在日本へ帰化している外国人選手が何人か居ますが、そういう選手を使ってでもアジアで勝つ必要があります。また、指導者同志が強化について率直に話し合い、情報交換を密にしていろいろな人の意見を前向きにまとめる形で強化策を作る方がいいと思います。個人指導者のセクト主義はもう通用しない時代になっているのではないのでしょうか。

現在パブリセビッチ・コーチが若い選手を鍛えてくれています、やがてはオリンピックに出場することも目標としたチーム作りを期待したいです。そういう点では選手の入替えや一部ベテラン選手の起用など、代表選手に刺激を与えることも必要なことです。

それと日本代表選手にもっとプライドを持たせることも大切です。なんとなく代表選手をやっていると、怪我でもしたら馬鹿らしいとか、いやいやながら代表になっているような雰囲気を変えないといけません。皆が知恵を出し合い、選手たちがプライドを持って代表チームの練習に参加できるような環境を整えることです。過去の成功例にとらわれず、時代に合った強化策や組織を作り上げ、良い結果を出すことが重要なことだと思います。

あと国内での国際ゲームが少ないですね、代表選手が頑張っている姿をもっとアピールさせるためにも、国内で開催する国際ゲームを増やした方がいいです。

—— アイシンの強化策や組織作りはどのようにされたのですか？

バスケットボールでも頭から叱られるばかりでは面白くなりません。したがって私は頭ごなしに怒ることは控えていますし、若い人やベテランの意向を理解しながらぎりぎりのことしか言わないようにしています。バスケットが楽しくならないと勝てませんし、選手たちも自分で努力しようという気にならないと思うのです。だからといって緩みだけでは勝てませんので、アイシンでは若い人もベテランも楽しむところと真剣にやるところのメリハリは練習中でも必ずつけています。

—— 最近夜のゴールデンタイムにアイシンがテレビで紹介されましたね。

最近、面白いチームということでよく取材していただきます。「ファイブ」という本が出てからテレビでも多く取り上げられるようになりました。今後も漫画に登場したりコマーシャルに出演したりする予定も立てられているようです。「ファイブ」を映画化しようという計画もあると聞きました。

今はたまたまアイシンが取材されていますが、テレビなどで取り上げられることはバスケット界にとっても良いことだと思います。メディアに売り込むことは人気を高めることにすぐつながりますし、観客を動員する力になります。バスケットは競技人口が多い割には観客が少ないですが、アイシンがテレビに出るようになってから、地方などで急に観客が増えました。やはりテレビの力は凄いですね。

—— 今シーズンもいよいよファイナルに近づきました、これからも大いに頑張ってください。

有難うございます。アイシンも頑張りますが、周りも強くなってアイシンを破るようなチームが多くなることも期待しています。アイシンが負けることは、私たちにとって喜ぶべきことではないのですが、それは自分たちの努力が足りないから負けるのであって、さらに努力してレベルアップを図ります。そうやってお互いが切磋琢磨すれば日本のバスケットは必ずレベルアップすると思っています。

—— 本日は有難うございました。

.....
(広報部付記)

図書紹介 「ファイブ」

平山 譲著、日本放送出版協会発刊

鈴木ヘッドコーチ、佐古、外山、後藤、佐藤、マッカーサーの各選手を題材にした書籍

平成16年10月30日発行、250ページ、¥1500

特別寄稿



記者の目から見た日本のバスケット

朝日新聞スポーツ部 由利 英明

2004年シーズンの日本バスケットボール界で、記憶に残る試合がある。全日本学生選手権の男子準々決勝、慶応義塾大学（以下慶大）対青山学院大学（以下青学大）戦だ。

第3クォーター途中まで、青学大が個人能力の高さを全面に出した。関東2部リーグではあったが、優勢に試合を進めていた。

しかし関東覇者の慶大も志村雄彦主将を中心に奮闘した。慶大はスポーツ推薦入学がないため層の薄いチームだが、コートを転がるボールに食らいつき、ラインを割ろうとするボールにも飛び込んだ。そのたびに代々木第2体育館の観衆を沸かせた。次第に、慶大への声援が強まっていった。

青学大もルーズボールへ執念を見せたが、慶大は初めの一步の早さで勝った。試合の流れは傾き、第4クォーターに慶大が逆転。つかんだ勢いで、45年ぶりの頂点に駆け上がった。

私は昨年夏までの2年間、米国ロサンゼルスで駐在生活を送った。大リーグ取材が中心だったが、NBAも見ることができた。慶大対青学大戦を観戦しながら、ワシントン・ウィザーズで現役生活を終えたスーパースター、マイケル・ジョーダン氏の言葉を思い出した。

「技術が下手でもいい。若い選手には戦いへの気迫を見せて欲しい」。

NBA人気を支える根本的理由は、生存競争を勝ち抜いた者だけが見せられるシンプルな戦いの姿勢だろう。慶大に声援を送ったファンは、ひたむきにボールを追う単純な闘争心に共感したに違いない。その慶大が優勝を決めた全日本学生選手権決勝は、会場が満員に膨れあがっていた。

「バスケットは見るスポーツではなく、するスポーツ」、こう話す人がバスケット界の中にもいる。サッカーや野球のようなメジャースポーツの座を断念する声だ。しかし、あきらめるのは早い。慶大の試合を見れば、一般ファンが何を求めているかが分かる。

人気獲得に向けて、日本バスケット界のシステムは改良点が少ないと思う。スーパーリーグの選手の多くはプロ、または契約選手なのに、新潟アルビレックス以外のチームは実質、会社の福利厚生の一環にすぎない。これでは一般ファンの共感は得られない。

さらに、企業対企業の戦いでありながら、ホーム・アンド・アウェー制を名乗っている。一般ファンに他人の企業の応援を強いるシステムには無理がある。

これらは決してバスケット界だけの問題ではない。しかし、リーグの構造は時代遅れになりつつある。それはファン軽視にもつながっていると言える。さいたま市を主会場に開く2006年男子世界選手権の資金繰りの厳しさも、そんな姿勢から来ているのかも知れない。

NBAは、選手も球団も、そしてリーグも、プロ化されている。ファンは地域名のついた地元チームを応援する。この単純さがわかりやすい。米プロスポーツのすべてが正しい、という見方は間違っているが、一般の人が理解しやすいシステム作りは参考にするべきだ。

バスケット人気は日米で、雲泥の差がある。だが、選手自身の技術は確実に差がなくなっている。特に日本の若手はシュート力も含めて急速に進歩している。

慶大の竹内公輔、東海大の竹内譲次の兄弟のように、将来のNBA入りが期待される大型選手も出てきた。小さくて素早いのが日本人、という固定観念はもう古すぎる。大きな選手でも世界に勝負できる時代が、来つつあるように見える。

国内で高いレベルの競争を続ければ、田臥勇太選手に続くNBA入りも夢ではない。実際、米国のマイナーリーグで挑戦する日本選手も増えてきた。将来性ある若い選手のために、日本バスケット界はどんな舞台を用意できるのか、が問われている。

その中で、日本協会の傘下外であるbjリーグには、勢いがある。日本初のプロリーグを目指すだけに、優秀な外部識者の声を集め、十分に時間をかけて開幕日を迎えつつある。

リーグが成功するかどうかは別として、スタッフはまさに生き残りをかけている。新リーグの情熱には感心させられる部分が少なくない。

トライアウトに参加したある選手が、こう言っていた。「NBAが最終目標だから、プロリーグでやりたいし、プロ選手じゃない人とは一緒にやりたくない」。こう話す選手は、今後ますます増えるだろう。bjリーグが若い選手の思いをくみ取っているという事実は、否定できない。

一方の日本協会側は、確かな将来像を示していない。プロ化検討実行委員会の設置を華々しく発表したのが、3月末まで途中経過は明かさないとした。一度はつかんだファンの関心を、長い沈黙の間に自ら手放したのではないか。選手自身も、こんな対応では将来が不安だろう。

さらに、プロ化のことも含め、情報発信が少なすぎる。例えば、日本代表候補選手や監督選びについても、その選考過程をできるだけ明らかにし、注目を集める努力をするべきだ。決まるまでの過程をあれこれと推測しながら、楽しむ人は少なくない。

スーパーリーグとbjリーグ。二つのリーグが並立できるほど、日本のバスケット市場は大きくない。さらに、bjリーグが失敗すれば、日本でのプロリーグ化は難しいとも見られる。それは日本バスケット界全体のイメージダウンにつながるだろう。

一般ファンにとって、日本協会の傘下であろうが、なかろうが、あまり重要なことではない。おもしろい試合が見られるか、見られないのか、が大切なことだ。選手の立場なら、いいプレイをできる環境があるか、そうでないのか。ファンや選手の思いをいかに具現化するかが、当然プロリーグ成功の鍵となる。

すでに、メンツや派閥、学閥といった問題では片付けられないところに来ている。バスケットという大きなくくりで団結しなければ、一般ファンの意識はどんどん離れていってしまう。

休部したボッシュを率いていたジョン・パトリック氏が、かつてこう語っていた。

「米国の強豪高校には、1学年100人以上のバスケット部員がいる。その中で生き残った者だけが大学に進み、NBAでプレイできる。だから、必要とされる闘争心が、日本とは比べものにならない。」と。 闘争心！！パトリック氏の言葉は、実は選手だけに向けられたのではない、と今思う。

日本の若い選手が、本来持つはずの闘争心をいかに発揮できるか。その舞台を提供しなければならぬ要職の方々に訴えた言葉だったかも知れない。

日立甲府の創部から甲府クィーンビーズへの変遷

—— 地元を含めた地域密着型運営 ——



島立 登志和

昭和39年(1964)山梨県初の誘致工場としてスタートした(株)日立製作所甲府工場から、女子のバスケットボールのチーム作りを依頼されたのが、昭和41年の秋のことでした。

創部にあたっては、当時の工場長であった河島茂さんから、誘致工場としての意味合いもあるので、地元山梨県のためになる実業団チームを作って欲しいという要望があり、後はすべて貴方に任せるからということでチーム作りに着手しました。

東京、神奈川で教員をする傍ら、バスケットボールを通して多くの方々にご指導を頂き、そしてまた素晴らしい体験をすることが出来、その多くの経験を生かして山梨県協会の審判委員長、技術委員長として、山梨県バスケットボールの向上発展のために微力を尽くしていた関係もあり、実業団チームとして地元のバスケットボール関係者と遊離することなくチーム作りに専念することができました。

当時を振り返り、懐かしく思い出されることとしては、甲府工場の関係者が関東実業団連盟に加盟するためその申請に出かけた折、加盟しても甲府からリーグ戦のために毎週東京に出てくることは大変ではないか、ということで加盟申請を受け付けてもらえず、困ったことがあります。私が神奈川県の実業団審判委員長をしていた頃、当時関東実業団連の理事長であった富士さんをお願いに行き、関東実業団でA級審判員としてお手伝いをしていたことなどをお話したところ、それならばよろしいと、関東実業団4部のリーグ戦から参加を認めていただいたという一幕もありました。

当時、甲府という田舎に存在するチームを作るわけですから、チームに特色がなければ長続きしません。そこで真面目な選手を集めて頑張りのきくチーム、そしてオールコートでマンツーマンディフェンスを展開するラリープレイのできるチームを目指しました。

そして、それに適応するプレイヤーを集めてチーム作りをスタートしようと必死の努力をしたものでした。

昭和43年(1968)のチーム創設以来、今年で37年目というチームの歴史を重ねてまいりましたが、地元山梨県に根を下ろしたチームということで、その年の福井国体に成年女子の山梨県代表として参加して以来、日立甲府、甲府クィーンビーズ、玉川クラブ(OGで固めたチーム)で編成したチームで、今年まで連続37回もの国体チームとして山梨県の成年女子を支えてまいりました。

昭和48年(1973)に第7回日本リーグの実業団リーグに初めて参加することができ、その翌年度関東実業団へ降格しましたが、1年で復帰することが出来、日立甲府として25年間という日本リーグを経験することができました。

日本リーグの各チームが、企業スポーツの厳しい環境におかれている時(平成10年を前後として日本リーグチームのユニチカを始めとした14チームが休廃部という現実)、日立甲府もその波に押し流されそうになったのが、平成10年10月のことでした。

当時の工場長であった梅沢正春さんからチームの存続についての厳しい相談を受け、長くチームに関わってきた者として、苦しみ悩みました。どうしたらチームを続けられるの

か、ぎりぎりの意見交換と工場側に存続についてのお願いをし続けたことが、昨日のように思い出されます。

そんな折、山梨県の当時の教育長であった興石和雄氏が、県の代表として日立甲府工場にチーム存続について強力なバックアップをお願いし、また山梨県バスケットボール協会役員全員によるチーム存続を訴える陳情書が日立甲府工場へ提出されました。

こうした多くの地元関係者による応援と、日立甲府工場のご理解もあって、厳しいチーム運営とはなりましたが、平成11年4月1日より、山梨県のファンの方々をはじめ全国にいる日立甲府ファンのバックアップのもと、甲府クィーンビーズバスケットボール部と改称し、母体を日立甲府工場に置くクラブチームとして、再スタートをきることができました。

新チームは、選手10名で勤務は一般従業員と同じく平常勤務ということで、選手にとっては非常に苦しい部活動をせざるを得なくなりました。練習開始を少しでも繰り上げるために、朝30分早く出勤し、何とか16時30分から練習が開始できるようにという大変な努力で練習時間をキープしました。

練習が終わり、食事、洗濯、風呂のスケジュールをこなすと就寝時間は大体23時を過ぎることが殆どです。怪我は許されない、睡眠時間はぎりぎりの7時間、そして運営費を節約するために、自分が身につける練習に必要とされる物はすべて自己負担という環境の中で、選手諸姉は実によく頑張ってくれてきたなと感謝しております。今では素晴らしい選手たちに恵まれたものだ、しみじみと感無量のものがあります。

母体である日立甲府工場には精一杯の協力をしていますが、とにかく運営費が不足します。甲府クィーンビーズのスタート当時は、バックアップしていただける体制もない中、有力なファン、OG、県協会、その他多くの方々の大変な応援を得て平成11年から4年間、運営費を集めるために必死の思いで取り組みました。

ようやく平成15年に、工場関係者と現甲斐市長の藤巻義磨氏のご尽力で後援会組織作りが軌道に乗り、甲府クィーンビーズバスケットボール部後援会を発足することができました。

創部以来37年の歴史を刻むことが出来た日立甲府・甲府クィーンビーズバスケットボール部の前途は多くの課題を抱えております。より強力な後援会組織の充実、より多くのファンの獲得、そしてWリーグ13チーム中、唯一のクラブチームとしてWリーグへの復帰、Wリーグ制覇を目指して、監督10年目を迎える炭田さんを支え、チームを預かる者として更なる努力をしてまいりたいと思います。

〔甲府クィーンビーズバスケットボール部部長兼総監督〕

.....
(広報部付記)

甲府クィーンビーズバスケットボール後援会は、山梨県内はもとより東京、神奈川、群馬、静岡の都県と金沢市、伊那市など全国に12の支部があり、山梨県協会を始めとして一般ファン、会社のOB、OGなど多数の人で組織されている。メインのスポンサーは新しく出来た「ルネサス・テクノロジー」という半導体の製造会社だが、甲府クィーンビーズ年間運営費の約40%を後援会で負担しているという注目すべきシステム。企業だけでなく地域や一般ファンを巻き込んだ運営は、バスケットボールのみならず、これからのスポーツ活動のあり方について一石を投じている。

わ が 軌 跡

私のバスケット人生



川本 禮治郎

私のバスケットの歴史は秋田県に始まる。仙北郡六郷町という出身地は、秋田県内のバスケットボール発祥の地であったようだ。

生家は大型の雑貨店を営んでおり、倉庫の中にバスケットのリングがありボールも転がっていた。両親はバスケットが好きだったようだが、本格的にバスケットをやっていたのかは定かではない。

たまたま叔父の故川本文治郎が、地元のクラブチームでプレイしながら、横手美入野高校（現横手高校）のコーチをしていたのを見ていたせいか、六郷中学へ入学してすぐにバスケット部へ入った。中学卒業後、横手美入野高校に入ったときもすぐにバスケット部に入って、1年生のときから試合に出してもらった。

横手高校3年生のとき秋田県で開催された、第7回インターハイには県予選で優勝して出場することが出来た。結果は3回戦で松本深志高校に負けてしまったが、このときめっちゃめっちゃシュートを打って、一人で44点得点したことを覚えている。

そのせいもあってか、当時学生界ではNo.1だった立教大学から声をかけていただき、田舎者には到底通用しないだろうと思って、当時監督だった故河村次郎先生と細川昭二先生に相談したところ、「せっかく声をかけていただいたのだから、挑戦してやってみなさい」と言われ、立教大学へ入学した。

東京の一流大学でバスケットが出来る期待と、どれだけやれるのかの不安が入り混じって、入学して最初の練習に行ったところ、なんとそこには100人近い部員がいて、まず驚かされた。これは大変なことになったと思いつつも、入ったからには頑張らなければと自分に言い聞かせて、練習に闘志を燃やしたものだ。

当時、立教大学のコートは体育館とは名ばかりのもので、床は地面から1mほど掘り下げた固い寄木張りで、薄暗い照明、天井も低くてうまくシュートしないと、屋根を支える鉄骨にすぐボールが当たってしまうような代物であった。

幸い1年生のときから一軍に抜擢されて、試合にもそこそこ出してもらった。両国のメモリアルホールで開催された正月のオールジャパンで、準決勝で実業団トップクラスの三井生命と対戦したとき、リードされていた後半残り10分、いきなり出場を命じられ、頭に血が上って何がなんかわからない状態で打ったロングシュートが入ってしまった。

当時は3ポイントがなく2点だったが、それをきっかけとして三井生命に逆転勝ちしてしまい、翌日の決勝戦で日本鋼管（NKK）にも勝って優勝したことは忘れられない。今考えると運も半分手伝ってくれたようなものだった。

大学2年からは一応レギュラーで、当時厳しかった故前田昌保監督や加瀬正巳コーチによって、結構試合に出させていただいた。大学4年生のとき全日本代表選手に選ばれて、昭和33年(1958)東京で開催された第3回アジア大会に出場した。このとき全日本代表チ

ーム14名中に、立教大学の現役から故奈良、金川、川本の3名、OBから斉藤、杉山、東海林という3名の選手がおり、全日本代表チームの半分近くが立教大学勢だった。

大学卒業後は、いくつかの実業団チームから声をかけていただいたが、九州八幡（現在北九州市八幡区）にあった八幡製鉄に入社した。八幡製鉄には立教大学OBの杉山武雄さんという名シューターがいて、「他社を断ってうちに来い」という強いお誘いもあって、お世話になることにした。

当時は日本リーグもなく、全日本実業団選手権やオールジャパンなどが注目される大会だった。九州地区には他に強いチームがなかったため、これらの大会には常連組として出場できていた。

現役引退後は八幡製鉄チームのコーチを2年間引き受け、昭和42年(1967)から始まった日本リーグにチームを引き上げるべく努力した。

昭和45年(1970)八幡製鉄が富士製鉄と合併して新日本製鉄となり、主力工場も九州から千葉県君津市へ移転、バスケット部も合併して新日鉄チームとなり、私の勤務も東京本社となった。

東京本社勤務後、新日鉄チームとは別に新日鉄本社チームを作って、関東実業団リーグ戦に参加、昔のプレイの味が忘れられなくて年甲斐もなく試合に出場、案の定アキレス腱切断というアクシデントに見舞われ、プレイを辞めることになった。

その後、実業団連盟で役員をされていた、新日鉄OBの故大塚洋三さんから声をかけていただき、関東実業団連盟の役員をさせていただくことになった。

縁あって昭和48年(1973)に関東実業団連盟の理事長に就任させていただいたが、昭和51年に新潟営業所勤務を命じられ、理事長のまま新潟へ転勤した。当時は新幹線がなく実連の会合があるたびに、新潟から東京へ出てくるのは大変だった。夜、会議などが終わったあと、上野から夜行列車に乗り、翌日の明け方新潟に着いてから、家で風呂に入ってすぐに出勤するというハードさだった。

その頃は各企業とも経済的にある程度豊かだったこともあり、実業団連盟に登録するチームが年々うなぎのぼりに増え、日本リーグの運営と合わせて、連盟の財政が豊かだったことは幸運であった。同時に日本実業団連盟の理事長も任命され、近畿の奥田薫氏、東海の故中井宗康氏、関東の中瀬達雄氏の各副理事長らとともに、日本リーグ発展のためいろいろ努力を重ねた。

昭和54年(1979)、日本協会の理事および男子強化委員長に任命され、昭和57年インドのニューデリーで開催された第9回アジア大会に、全日本男女の団長として参加したが、当時インドでは水事情が悪く、選手たちが体調を崩さないような飲料水の確保が大変だった。

現地でも程度がいい水を仕入れ、ホテルに濾過機を持ち込んで、スタッフ全員できれいな飲料水を造り冷蔵庫で冷やす作業に追われたことを鮮明に覚えている。

この当時も全日本男子のオリンピック出場は、日本協会最大の課題であったが国内の競技日程を大幅に変更して、全日本チームの強化期間を長期に確保する調整は難航した。

昭和63年(1988)日本リーグの運営権をめぐる、日本協会と日本実連が対立したときは、前述の副理事長や実連の役員たちと夜も寝ずに対応に苦労したものだ。それまで日本リーグは、実業団選手権を兼ねて日本実連が運営を任されており、優勝チームには高松宮杯も用意されていただけに、簡単に日本協会に運営を委譲するわけにはいかなかった。

当時、日本リーグの開催は全国各地方実連の努力により、日本バスケットの強化、普及

の両面から全国的に展開され、開催地も北海道から九州まで多彩であったし、地方実連が日本リーグの開催によって、日常の運営費を捻り出す事業の一環にもなっていたからである。

意に反して日本リーグの運営は、平成元年(1989)日本実連から日本協会へ移管され、日本リーグの主管権を失った実業団連盟は、その後運営の見直しを余儀なくされた。

日本リーグはJBL、WJBLとなって今日に至っているが、バスケットボールの強化、普及、発展のためには更なる努力も必要ではないかと思っている。我々が運営していた頃は、その目的のために全ての役員が無償で運営に当たったものである。

最近ではチーム数の減少もあって、JBLやWJBLへ参加したいというチームが少ないと聞く。全盛期のように日本のバスケットを引っ張るチームがひとつでも多く出現し、日本のバスケットが大いに発展することを願っている。

一方で、昭和53年(1978)に実業団協力会として発足した現在の日本バスケットボール振興会に当初から入会、バスケットボールの普及、発展に微力を尽くすことになった。平成9年(1997)から事務局長に任じられ、現在渋谷にある小さな事務所で、毎週火曜日と木曜日に振興会の事務をとっている。

今、振興会の会員数は270名あまりで全国に展開し、バスケットボール振興のため、懇親会他いろいろな活動を行っている。

日本のバスケットが国際的にも強くなって、男女共がいつもオリンピックに出場できる日を夢見て、バスケットボール発展のため裏方仕事に励んでいる。

〔振興会副理事長〕

Molten®

INNER FIRE

情熱とは、あなた自身の内なる炎。

一途にトレーニングに励むときも、

戦いに敗けても挫けず

何度も果敢に挑戦し続けるときも、

熱く、まばゆく燃え続ける。

熾烈な戦いのなかで、

すべての敵を焼き尽くしてしまうまで。



- F I B A (国際バスケットボール連盟) 主催国際大会唯一の公式試合球/男子
- J A B B A (日本バスケットボール協会) 主催大会公式試合球/男子
- J B L (バスケットボール日本リーグ機構) 主催大会唯一の公式試合球
- W J B L (バスケットボール女子日本リーグ機構) 主催大会唯一の公式試合球 (2003 - 04シーズン)

MTB7AT 7号球 ¥9,240(本体価格¥8,800)

国際公認球・検定球・貼り・天然皮革・ワイドチャネル
(表記の価格はメーカー希望小売価格)

ハ詩 (はちうた)
BISTRO-HACHI-UTA

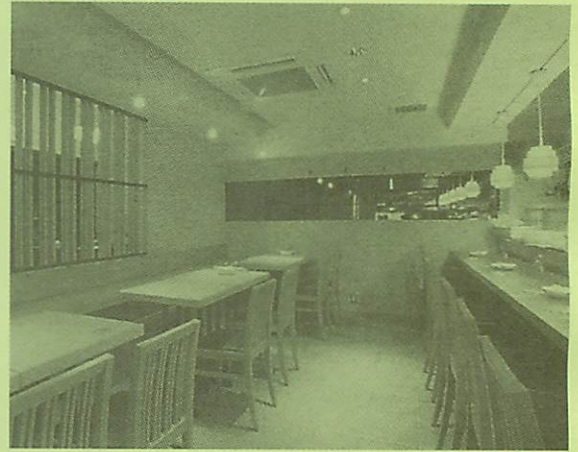
BISTRO 八詩

渋谷の喧騒を忘れそうな和める空間で、旬の素材を。

ごまや

BISTRO ごまや

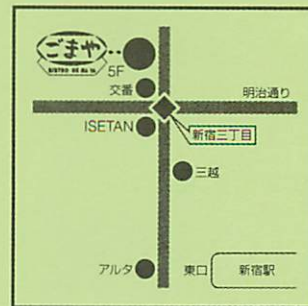
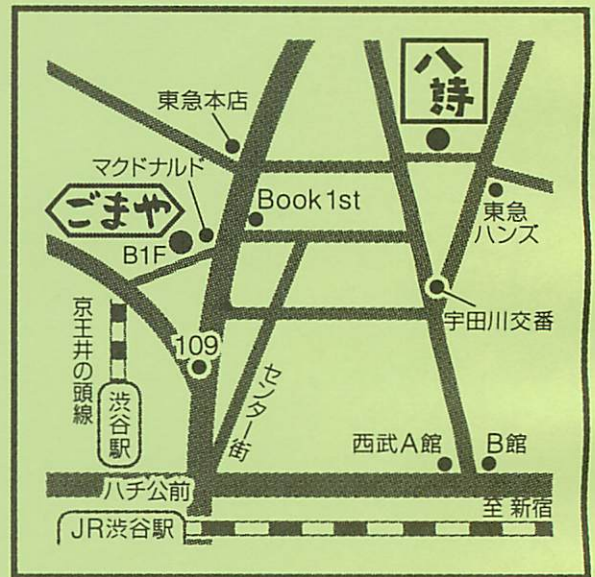
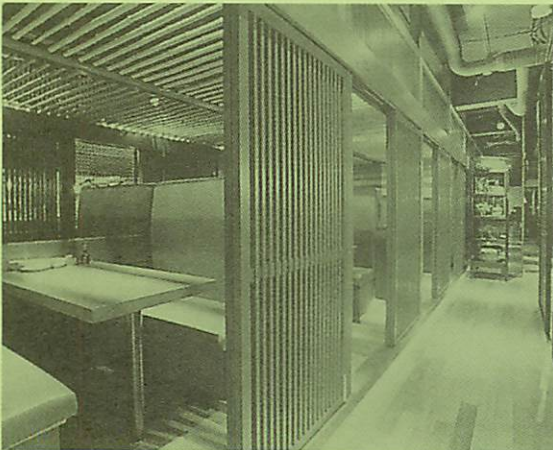
渋谷の真ん中と思えない、まるで大人の隠れ家。



ごまや

BISTRO ごまや・新宿店

素材にこだわった料理とひとときを、和みの空間で。



東京都新宿区新宿3-4-1
カルムビル5F
tel:03-5269-8158
Open 11:30 ~ Last Order 22:45
年中無休 (120席(個室大小12部屋))



おすすめメニュー

手造り胡麻豆腐
季節の野菜で胡麻よごし
豚肉ニンニク味噌巻き
生タコの青のり揚げ
ピリッと胡麻の葉炒飯
生ウニたっぷりスパゲッティー

JACKPOT GROUP OFFICE ジャックポットグループ・オフィス
〒155-0032 東京都世田谷区代沢5-35-8 岩瀬ビル1F
TEL 03-3413-9555 / FAX 03-3412-7332 www.jack-pot.co.jp